

水島ゼミ史

2009年1月 永里桂太郎（11期）作成

①水島ゼミ前史

I 札幌学院大学時代

水島先生は、1983年9月1日札幌商科大学商学部¹に助教授として赴任する（このとき水島先生30歳）。翌84年4月に新設される法学部（同時に札幌学院大学と校名変更）の開設準備要員としての、半年早くの着任だった。当時先生の授業は法学1コマだけであり、あとは道内各地の高校まわりをしたり、入試説明会に出る日々だった。

札幌学院大学・水島ゼミは商学部1期、法学部3期までである。このゼミでは、先生は北海道のさまざまな憲法問題取材のために、学生たちと車で各地取材してまわっている。そこでは恵庭事件の分析や、在日朝鮮人のゼミ生が悩んでいた指紋押捺事件をゼミ内で研究・議論したりした。このゼミでゼミ生も憲法のおもしろさに目覚めるようになり、水島ゼミの憲法の動態的研究がここで始まった。また、このゼミでは「法社会学的分析」というテーマで3回ゼミ論集を作成している。

北海道時代の水島先生は札幌学院大学だけでなく、他大学でも教鞭をとっていた。例えば、岩見沢にあった駒沢大学北海道教養部で専門科目の「ドイツ法」を4年間教えた。先生の専門であるドイツ法を教えることができたため、先生もより熱を帯びた授業を展開した。教え子の一人がその授業の影響で、シベリア鉄道で東欧に向かい、最後は東ベルリンから西ベルリンに抜けるという旅をするなど、学生への影響も大きかったようである。

また、水島先生は札幌学院大学において、久田栄正教授との出会いを果たしている。この出会いは今の水島先生を語る上でははずすことができないものである。この久田教授の戦争体験を水島先生がまとめ、『戦争とたたかうー憲法学者のルソン島戦場体験ー』を出版する過程で、平和主義を軸とする水島先生の今の専門が形作られていく。

参考 直言 2003年7月14日『雑談(25)大学教師20年』

直言 1999年12月13日『久田栄正教授没後10年』

II 広島大学時代

1989年9月、水島先生は北海道を離れ、広島大学総合科学部に助教授として就任する（当時水島先生36歳）。学部全体で20人ほどしか学生がおらず、学生よりも教員の方が多いという特殊な状況の下、水島ゼミは毎年2～3名ほどの学生を迎えて行われた。少人数ながら選考は厳しく、希望しても落とされる学生もいたという。この広島大学・水島ゼミは、先生がベルリンで在外研究をされた一年を除き、4期生を迎えるまで行われた。

1993年2月、この広島大学・水島ゼミにおいて初めて沖縄合宿が行われた。この沖縄合

宿中、水島先生は沖縄県庁で講演をされ、その際、当時の読谷村長・山内徳信氏との出会いを果たしている。この広島大学・水島ゼミでは2度にわたる沖縄合宿が実施されている。

Ⅲ 早稲田大学時代

1996年4月、水島先生は早稲田大学法学部に教授として復帰する(当時水島先生42歳)。1996年の一年間は、水島ゼミは開設されず、先生は「外国文化研究」というゼミ形式の授業を担当した。この授業では「ベルリンの壁崩壊後の世界」をテーマとし、各国の人権状況を英語で読むという内容で行われた。

1997年、早稲田大学・水島ゼミのゼミ生が初めて募集された。水島先生は早稲田着任時から、「早稲田大学法学部に沈殿せる、こだわりの人材の発見と育成に努め」ることを目指していた。「沈殿」とは、「いい成績を要領よくとって、試験に早く受かり、いいところに就職することが自己目的化されるような風潮のなか、きっと無骨に自分の道を歩もうとする学生がいるに違いないと信じての言葉」である。

案の定、1期生には「こだわり」を持った希望者が多数集まった。そのこだわりの人材から先生は泣く泣く不採用者を出し、30名ほどで水島ゼミは創設された。

資格を取ること、就職につながるものがさらに求められ始めている現在、この「役に立たないが、ためになることを学ぶ」という水島ゼミ創設時の理念は、さらに重要となってくるであろう。

参考 直言 2003年7月14日『雑談(25)大学教師20年』

直言 2008年3月24日『卒業生をおくる言葉(その2)』

②ゼミのあり方に対する攻防

早稲田大学・水島ゼミ第1期は水島先生にとって、ゼミのあり方を試行錯誤する期間でもあった。先生の一言で物事が決定することが多かった札幌学院時代、少人数ゆえ、運営の必要性が少なかった広島大学時代と異なり、30名ものこだわりをもった学生との付き合いは大きなカルチャーショックであった。

水島先生は札幌、広島とゼミ生の発表に口を多く出し、やる気の無い発表を行った際には発表中に怒り、研究室に帰るといった行動もとっていた。早稲田においても、今までどおり先生は発表中に怒り出し、研究室に帰った事が一度だけあった。札幌学院時代であれば、ゼミ生があわてて研究室にやってくる、謝罪の言葉を述べていたはずである。しかしながら、早稲田では学生がいくら待っても研究室にやってくる。先生は、あきらめて家路についた。次の日先生が授業を終えると、ゼミ生がやってきた。彼らは発表のやり方のまずさに対して反省の弁を述べたものの、二言目には「でも先生、発表中に帰るのはおかしい」と反論してきた。先生は早稲田の学生は一味違う、と内心喜びながら、「じゃあ、ゼミのあ

り方について議論をしよう」とゼミ生を引きつれ、飲み屋に行き、ゼミの運営方法についての長時間議論をかわした。

この1期生と先生との議論が、それ以降の水島ゼミのあり方を決めることになった。これ以降、次第に先生は、ゼミを「苗床」、自身を「苗床の管理人」と称し、ゼミの内容に過剰に口を出すことを控え、種子たるゼミ生が、自分達で考え、自分達がよいと思うことを行うことを見守るようになる。

しかし1期、2期の時代はまだ先生が発表中にダメだしをすることも多く、1期、2期の時代は、ゼミ生が「先生をいかに黙らせるか」ということばかりを考え、皆で発表準備に取り組んでいたという。そのような中、ある発表で先生がほとんど発言せず、いい発表だったと最後に講評したことがあった。そのときの発表班の喜びようは尋常でなく、ゼミ後にその発表は車を飛ばして新潟に行き、夜の日本海に飛び込むほどであったという。

参考 直言 1999年3月22日 『卒業生をおくる言葉』

直言 2004年1月19日 『雑談(31)セミナーリウム(苗床)物語』

③運営方法の模索

I ゼミの時間と教室の確保

当初水島ゼミでは、3・4年ゼミも1コマで行われていた。しかしながら、議論、発表をしっかりとやろうとすると、どう考えても足りない。自然とゼミの時間は延びていった。ところが当時は、早稲田では教室が不足しており、授業がきっちり入っていたため、18時には法職の授業の人たちが教室の前に並んでおり、さまざまなプレッシャーをかけてきて、延長ができなかった。そのため、当時は発表後の運営等の話し合いは廊下でやるなど苦しかった。

それから何年かたって、2コマの教室を与えられるようになり、3期のころから2コマ連続のゼミが定着した。現在では、木曜日の教室は4限以降(1年ゼミを入れると3限から)水島ゼミ専用のもとなっている。通常では与えられない2年ゼミの教室も3・4年ゼミの隣に用意してくれるなど、事務所で水島ゼミへの理解ぶりはあり難い限りである。しかしながら、この教室獲得には、過去の先輩達が交渉を続けやつのことで獲得したものであることを忘れてはならないだろう。また、水島先生が3・4年ゼミに2コマ連続、2年ゼミに1コマ付き合ってくれているのは当たり前のことではなく、ボランティアであることも忘れてはならない。

参考 直言 2006年10月2日 『雑談(53)学生たちへの言葉(その1)』

II 2年ゼミの誕生

早稲田大学では 2007 年から、当時の 3 年卒業生にもゼミを体験させるという政策の下、2 年後半から主専攻法学演習を履修することとなった。この 2 年後半からゼミに入るという制度は、水島ゼミにとって存在の危機であった。一番の危惧は 2 年後半からゼミ生が入ってきてしまうことによって、3 年生が萎縮するということであった。水島ゼミとしては、当時の石崎ゼミ長を先頭として、執行部に 2 年後半からのゼミ参加に対する反対の意見表明などを行った。資格を取ることに特化していく大学に対して、「壮大な無駄」をも大事にする水島ゼミが反発したのである。

この問題に対処するため、水島先生はさらに持ち出しで 2 年後半ゼミを 3・4 年ゼミとは別に作るという決断をした。この 2 年ゼミは試行錯誤を繰り返し、先生とゼミ生がぶつかりながらだんだんと形作られている最中である。

参考 直言 2008 年 3 月 24 日 「卒業生をおくる言葉 (その 2)」

④ゼミ生の採用方法

最初ゼミ生は先生が全部決めていた。その当時を示すエピソードとしてこのようなものがある。1998 年後期から、99 年前期まで (水島ゼミ 2 期後期から 3 期前半まで) 水島先生はボンで在外研究をされた。その間は浦田賢治先生がゼミを見ていた。3 期にとっては、水島先生のゼミなのに浦田先生が見ていたことで、「自分達は水島先生に本当に選ばれたのか」という思いがあったという。しかしこのときでも、選考は水島先生がきちんと行っていた。ゼミ希望者の志願書を全てボンまで送ってもらい、ライン川ほとりのベンチに広げ、ゼミ生を選んだそうである。「君達はライン川ほとりのベンチで選ばれた。」この言葉を聞いた 3 期はようやく、自分達もきちんと水島先生に選ばれてゼミに入ったのだと納得したそうである。このように当初は水島先生の独断でゼミ生は選ばれていた。

しかしながら、このゼミ選考の方法は 5 期の時から変わることになる。選考の原則として、「教員と学生と一緒に選ぶ」ようになったのである。このときから、選考に当たっては先生からの課題と、ゼミ生からの課題の二つが課されるようになり、そのレポートを先生、ゼミ生がそれぞれ読み込み、協議をして決めるという形式になった。ここには結論よりも過程を大事にするというゼミの基本姿勢が現れている。志願者を落とすという過程において、「これだけ優秀な人を落とす資格が自分にあるのか」「去年、自分がなぜ選ばれたのか」等々を、ゼミ生が自分に問いかけることになり、今後のゼミとの関わり方を見直すことになるのである。

参考 直言 2004 年 1 月 19 日 「雑談(31)セミナーリウム (苗床) 物語」

⑤合宿のあり方

早稲田大学における水島ゼミでは、ゼミの創設以来、毎年夏に取材合宿を行っている。1997年広島での合宿を皮切りに、98年沖縄、99年関西、2000年沖縄、01年長崎、02年沖縄、03年北海道、04年沖縄、05年長崎、06年沖縄、07年北海道、08年沖縄で行われてきた。回数では沖縄が隔年ごとに行われ、計6回、長崎が2回、北海道が2回、関西が1回である。

水島先生は01年の合宿報告集の序文に、合宿の意義について以下のように書いている。

「学問は旅である。自ら前に出るから会える。そこでの出会いが新たな発見と、次の出会いを生む。基地問題一つとっても、問題の構造は実に複雑である。学生たちは基地をめぐるさまざまな立場の方々に話を聞き、頭が混乱したと率直な感想を述べていた。私はそれでいいと思う。そんな簡単に解決策が分かるほど、問題は単純ではない。学生自身が、その『混乱』と向き合い、時間をかけて自分なりの解決策を模索して欲しいと思う。わがゼミのモットーは結論ではなく、プロセスを大切にすることにある。その意味では、合宿はリッチすぎる情報と出会いによって、思考に強烈なパンチを与えてもらえる刺激的な場でもある。」

事実、夏の合宿はゼミ生にとっても、先生にとっても貴重な出会いの宝庫であった。水島先生も先に述べたように広島時代の沖縄合宿で山内徳信氏との出会いを経験している。合宿という、時間、場所でしか出会えない人とであらう。まさに合宿は「出会いの最大瞬間風速」の宝庫である。

参考 直言 2000年5月1日 『私のモットー』

2002年4月1日 『鎌田定夫氏との「出会いの最大瞬間風速」』

2004年1月19日 『雑談(31)セミナーリウム(苗床)物語』

⑥ 執行部の作り方

現在のゼミ長一人、副ゼミ長二人という体制は、6期の武田浩太郎ゼミ長がチェコに留学することになったことで、それを補う為に二人の副ゼミ長を選任したのが始まりであった。これで上手くいったため、これ以降も執行部の3人体制が定着した。一人のゼミ長の独断でなく、複数人が話し合っ、ゼミ生の意見をまとめて運営を行う。また、執行部には男女間のバランスも取れていることが多く、違った視点も必ず入る。このことはゼミの運営を円滑にしていると思う。

⑦ ホームページ

2期の猪瀬 森主さんが、「先生、作りましょう」といって作ったのが水島ゼミホームページの最初であった。他ゼミがホームページを持たない中、極めて早い時期にできたもの

で、先駆的なものだった。

また、11 期の五味鉦平を中心に行ったホームページ改革も、画期的なものであった。この改革で水島ゼミのホームページが学校のサーバーに入ることになり、このことにより水島ゼミのホームページは安定し、安心して続けることができるようになった。

⑧「水島会」(旧 OBOG 交流会)

水島ゼミでは毎年、「水島ゼミの OBOG」、先生が 28 歳の大学院生の時に教えた法職課程教室憲法 A クラスの受講生である「水島組」などが集まる交流会が行われている。

この交流会は、先生の教え子達にとっては、先生や同期、先輩、後輩の友人と久しぶりに会い、気持ちを新しくできるものであるが、先生にとっても大事な会である。

水島先生は 2005 年 2 月に体調を崩され、1 カ月近く静養された。その後も 2005 年は本調子でない時期が続いたが、12 月に行われた交流会において、多くの教え子と会話を交わすことで、先生自身の「原点」を確認でき、「元気」をもらったそうである。この会の存在が先生の復活の役に立ったようだ。

また、この一年の経験が先生の今までの考えを変え、先生の退職の年 2024 年、水島ゼミ 26 期生まで育てることをこの会で宣言するにいたっている。

なお、この交流会の名称は 2009 年度より「水島会」とすることになった。「水島先生に会う会」ではなく、「水島先生で会う会」。先生に会うことを建前にして、教え子同士が交流する会でいいという先生の考えによる命名である。

参考 直言 2006 年 1 月 2 日 『憲法公布 60 年の年頭に』

ゼミに関する議論のためのヒント

①取材について

I、水島先生取材より

「2008年の沖縄合宿ほど取材数が多かった合宿はない。昔は取材数を絞り込んで、徹底的に調べて取材相手にぶつけていたが、近年のゼミは事前の準備が足りていないと思う。薄味の発表が増えている気がする。東京等で事前取材を行うのはいい。でも、合宿先で闇雲に取材を行うのはどうか。渡嘉敷に行った組は、集団自決経験者に「残れ」といわれて、集団自決の場を紹介してもらおうという貴重な経験をすることができたが、今回の沖縄では化学反応があまり起こらなかったのではないかと。徹底的に事前に勉強をし、それを相手にぶつくと、相手も「こいつらは違うな」と思い、貴重な話をしてくれる。そうでないと、現在のように薄っぺらい取材に終始してしまうことになる。多くの取材先に行って、時間があまり無いというのは大きなマイナス面であると思う。好奇心は絶対に持って欲しいが、ただの興味本位ではいけない。また、取材に関しては、人の痛みを痛みとして感じる感性を持たなくてはならない。事前の準備が不足すると相手のことを傷つけるような質問も平気でしてしまうことになるし、なかなか本音も語ってくれないだろう。」

「現在の状況は、ケータイやネットといったツールのマイナス面でもある。昔は取材したい人と連絡がなかなか取れなかったため、その取材相手に聞きたいことを煮詰める時間をとることができ、自然と一人の取材相手を大事にすることができた。今はネットの発達により、ぱっと全体を見渡せて取材を出せるのはいいが、一人の取材相手に対して時間をかけるということができなくなっている。

しかし、このツールのもつアクティブさは生かそうと思ったら大きなプラスにすることができるのも事実である。使い方をきちんと考え、生かしていくことが大事である。」

「ゼミでは何でもやれという方針であるが、全部の立場に過不足なくいくというのは反対である。人間は簡単には容易にニュートラルにはなれない。両方から距離をとれとは言ってもその場ではのめりこんで話を聞いた方がいい。バランスを無理にとる必要は無い。今は取材で分かったつもりになっている気がする。合宿でも予定調和的な取材が出てきているのは悲しいことだ。」

「行儀のいいゼミ生になる必要は無い。「過度のバランス主義」「過度の取材」が問題だ。もっと高いものを目指して欲しい。」

II、参考直言

●1998年10月26日『さまざまな出会い』

「まったく見ず知らずの人が初めて出会うとき、それ相応の段取りが必要である。講演依頼や原稿依頼の場合も同様だ。その昔、山田宗陸氏は『職業としての編集者』（三一書房）

のなかで、昨今の編集者は電話一本で簡単に原稿依頼をすると嘆いていた。まず手紙を書いて趣旨説明をする。しばらくしてから電話をして、「直接伺って説明したい」と述べ、筆者と会う時間を打ち合わせる。予定の日時に会って、説明の後に依頼をする。この三段階を踏むのが通常だという。山田氏自身、編集者を長くやっただけに重い言葉だ。私はゼミ学生たちに、この依頼の仕方を教えているので、彼らは人に取材するとき、きちんとこれを実行している。昨今の執筆や講演の依頼は、FAXやEメールが圧倒的に多い。もっとも、私は、相手の依頼趣旨と私の事情がうまく合致すればよいと思っている。大切なことは、FAXでもEメールでもいいから、問題意識がきちんと伝わるような文章を書くことだ」

②発表について

I、水島先生取材より

現在はレジユメの質も変わってきている。昔は情報に図書館で出会い、自分でレジユメにまとめるという手垢にまみれた努力したあとが見られるレジユメだった。でも現在はコピーのようなレジユメだらけではないか。現在はレジユメの分量がめちゃくちゃ増えている。本当にレジユメはこんなに必要なのか。レジユメが、広く、浅く、薄くなってしまっている。

II、参考直言

●2005年10月10日 『雑談(44)個人のコンピューター(PC)からの自由?』

「いまは、学生も院生も大量のレジユメを出す。情報量がものすごく多い。論点もたくさん書いてある。注も多い。でも、情報過多の丁寧なレジユメが手元にあると、報告者はそのまま読んでしまって、口頭報告の技が磨かれないということはないだろうか。自分ではたくさんレジユメを作って理解できているが、初めて報告を聞く人にとっては、話を聞きながら、目で追い、かつ思考も活性化させるという複数の営みを強いることになる。昔の大学院の授業や研究会は、ガリ版や青焼きのレジユメが数枚あるだけなので、情報量が限られている分、相手の顔を見ながら、丁寧に説明する必要があった。情報が少ない分、かえって思考がピュアになって議論が盛り上がったという面もあるだろう。最近の授業や研究会などでは、膨大なレジユメを目で追うのに忙しく、また報告者もレジユメに甘えて、報告したつもりになってしまっていることが少なくない。口頭で相手にしっかり自分の考えを伝える独自の努力を怠っているように思う。レジユメや資料に過度に依存することなく、口頭報告は独自に準備して、時間内におさまるようにリハーサルくらいして、本番にのぞんでほしい。あえてレジユメなしで、相手の顔をみなから1時間、しっかりと自分の考えを伝えることも、時には必要かもしれない。そうすると、いかに自分がそのテーマについて理解しているか、あるいは理解していないかがよお〜く分ると同時に、そのテーマを相手に理解してもらうには自分のすべての力を使う必要があることを悟るだろう（声

のトーン、表情、目の動きも含めて)。」

●2006年2月27日 『雑談(48)検索エンジンの功罪』

「インターネットの普及によって、またパソコンで原稿を書くことが一般化することによって、面白みのない、画一的な文章が多くなったように思う。パソコンで原稿を書かない私としては、手書きの感触は大事にしたいと思っている。だから、近年の答案やレポートを見ていると、よく似た文面が多く、「平均的」なものが目立つのが何ともさみしい。コピー機能を使って、安易に「増文」していくのだろう。文献の引用も厳密さを欠くものも出てきた。ネット時代の影響は、学問の進歩にプラスと同時にマイナスももたらしているように思う。」

「手と足を使って、額に汗して図書館で調べ物をする。辞書をひく。新聞を切り抜く。手書きのメモの山をつくる。勉強というのは地味なものである。こうしたことを着実に、確実に積み重ねていくことが大切だろう。ネットはそうした態度や努力の上に初めて有効であり、また有益なのではないか。電子辞書の完全普及で、「辞書をひく」という言葉が死語になり、また新聞紙が消えて「新聞の切り抜き」という言葉がなくなるのは何ともさみしい、という「旧人類」にやがて私もなるのだろう。」

●2008年7月14日 『雑談(68)たまには手書きもいいものです』

「ネット検索により、情報の収集や入手は格段に便利になった。反面、検索でヒットしたものが不正確な紹介だったり、ずいぶん昔の文章だったりして、誤解を広めることもある。本や文書なら、赤茶けた古い表紙や、その周辺情報などから、書かれた時代や背景がわかる。だが、ネットでヒットした文章は「いま」のこととして受け取られる。何とも悩ましい問題である。」

●2005年10月10日 『雑談(44)個人のコンピューター(PC)からの自由?』

「私は、講義などでパワーポイントは使わない。完璧に美しい画面を出して、論点も見事に整理されてプレゼンすると、確かにわかりやすいのだが、人間の思考が画面に支配されて、そこで話術を発揮して、人の想像力をかきたてるには、どうもしっくりしないのである。話す側も聞く側も、画面を「見る」ことに依存してしまう。もちろん、理系のテーマなどではパワーポイントは有益で、かつ有効だろう。でも、私個人としては当分の間は使わないつもりである。これは個人主義というよりも、個人趣味に近い。」

●2008年7月14日 『雑談(68)たまには手書きもいいものです』

「私はまた、講演や講義でパワーポイントを使わない。これを用いると、画面に情報がきれいにいるため、聴衆はそこに関心を向ける。話す方も説明を省略して、画面に甘える。目の前にいる相手に、真剣勝負で言葉を伝えたい私は、その話術を乱す道具とは距離をとっている。」

③議論について

I、水島先生取材より

現在では「生々しい議論」が失われてしまっていると思う。皆なぜかニュートラルすぎる。

議論も、浅く、広く、薄くなってしまっている。昔は報告をとめて議論をするようなこともままあった。昔は薄いレジュメでワークと議論をしていた。情報量は少ないと思うが、議論にはこだわりと濃さがあった。

II、参考直言

●2007年3月19日 『憲法96条と国民投票法』

(ゼミでの改憲論議と世間での改憲論議とを比較して)

「ゼミでも、議論は多方面に発展する。しかし、法学部のゼミ、しかも憲法ゼミという共通土俵のおかげで、「立憲主義」の基本から逸脱する意見が飛び出しても、すぐに批判的な意見がでてきて、バランスがはかれる。これが世間の改憲論議との違いだろう。」

→現在のゼミではどうであろうか

④私語をする最近の学生

II、参考直言

「だが、今年のクラス(740人)は年間を通じて異様にうるさかった。私の教師体験でもかかってない体験だ。しかも今回の携帯電話の件。圧倒的多数の学生は熱心に受講しているだけに残念である。740という人数が講義可能限界を超えたのか、「イマドキの大学生」のモラル低下が進んだのか、私の講義の迫力が落ちてきたのか、いずれにせよ、原因は携帯電話だけではなさそうである。授業が静かだと思ったら、全員が下を向いて携帯メールをやっていたという話もよく聞くから、うかうかできない(島田博司『メール私語の登場：大学授業の生態誌3』玉川大出版部)。」

●2003年2月10日 『大学の授業と携帯電話』

「最近、学内非常勤で担当している政経学部の前期試験の答案を採点していたら、「後ろに座ると私語で先生の声が聞きとれないので、もっと大きな声ではっきりと話してください」という感想が複数あった。ここまできたか、と驚愕した。私の声は大きくて、はっきりしているという評価を得てきたので、こういう感想は生まれて初めてだった。細長い大教室に580人がびっしり詰まって授業をやっているのに、教壇から遠い後方の学生の顔はまったく見えない。たまたまその周囲に座った学生の話では、そこは前方とまったく違った世界になっているという。たまに注意するが、いっこうに静かにならない。大学教師20年の

間に、北海道や広島で非常勤講師をやったが、私語が多いといわれた大学（「偏差値」は高くはない）で、私語なしの教室をつくってきた私としては、最近の高偏差値学生の荒廃には目を覆うばかりだ。もちろん、大半の学生たちは熱心に講義を聴いてくれている。鋭い質問をメールで送ってくる学生も少なくない。だから、この学部の授業を私はむしろ喜びとしているほどだ。でも、私語する学生たちも授業評価に参加して、勝手な評価を書き込むわけである。「学生による授業評価」の過大評価が禁物である所以である。」

●2003年11月3日 『視聴率と大学授業評価』

⑤ケータイ電話、インターネットの弊害

I、水島先生取材より

昔は連絡ツールが発達していなかった。昔はケータイなどなく、容易に連絡を取ることができなかった。例えば、2000年のコンパでは馬場のビックボックス前に集合だったのだが、集合時間前に先生一人しかいなかった。それから数人がやってきたが、多くは直接飲み屋に行くという連絡を送ってきた。先生はこのことに怒り、帰ってしまった。現在は「流れ解散」、「流れ集合」という習慣がついてしまっている。昔のような、手作りの連絡方法というものが失われてしまっている。

II、参考直言

●2004年10月18日『雑談（37）携帯メール効用論』

「今はケータイの発展で楽にはなったが、人間関係は失われてしまっている。便利になったツールの中でも手作りの良さを再認識すべきだ。

思えば 11 年前の沖縄合宿のとき、集合地点を間違えた 1 台をさがして、国道 58 号線に立ち続けたことを思い出した。ゼミのコンパも、遅れてくる学生のために、駅の伝言板（これはもう死語？）に書き込んだり、駅の出口を間違えているかもしれないと、反対側の出口に学生を走らせたりと、けっこう神経を使った。今時の学生は、こういう苦労が存在したこと自体が理解できない。逆に、集合時間に平気で遅れ、「寝坊しちやっせ。会場に直接行くからあ。よろしく」なんてやり取りを横で聞いて激怒したのは、今は昔である。でも、携帯電話の安易さと安直さに流されず、待ち合わせや連絡をとる際の気遣いは忘れたくないものである。」

●2001 年 1 月 29 日 『「荒れる成人式」考』

「いまの若者は携帯がないと、集合もできなくなっていたのだ。そういえば、帰国後、学生とコンパをやるため駅前で待ち合わせしたときのこと。私は時間通りに行ったが、そこには 3 人しかいなかった。「30 分もすれば集まりますよ」。一人が言った。私は激怒した。「〇〇さんから連絡が入り、二次会から出るので、場所決まったら教えてと言ってます」。私は沈黙した。それでも、会場には何とかみんな揃った。かつては、駅の伝言板（もう死語！）に書いておくとか、いろいろと工夫をしたものだ。遅れそうな人には、わざと集合時間を 20 分早く教えておくと、ぴったり集合できる。一人ひとりに、とにかくその場所に集まろうという意志があった。一端移動すれば、連絡をとるのが困難な時代だったから。いま、待ち合わせの風景は変わった。デモに「流れ解散」というのがあったが、最近「流れ集合」とでも言えようか。携帯が普及してから、「定刻主義者」の私は、待たされる時間が増えた。研究室で訪問者（記者、編集者等）を待っていても、約束時間直前に「いま向かっています」なんていう電話がよく入る。遅刻すれば人と会えなくなるという緊張感は確実に失せた。ゼミ合宿や取材で数台の車を連ねて移動するときは、学生の携帯は重宝する。だが、便利さの反面、失ったものも多いのではないか。簡単に変更がきくという安心感（甘え）の結果、「時間への思いやり」の気持ちが薄くなったように思う。遅刻を「時間どろぼう」と感じる人々も減った。アバウトに集い、アバウトに付き合う。社会のありようも確実に変わっていくだろう。今年は次世代携帯電話が広まる。あえて「携帯放棄」を宣言している者としては、時代に逆行することになるが、これからも「心の安定」の方を大事にしたいと思う。」